

はインプラント補綴物歯頸部に対し135度で毛先を当てるものであった。また、その方法に適し、かつプラーク除去に効果的であったのはテーパード毛で中心を短くカットした凹型断面の歯ブラシであった。

考察および結論：インプラント埋入時からの骨造成や2次手術以降の遊離歯肉移植などを施し適切な顎堤の形態を回復することが最良の方法であるが、必ずしもそれが可能であるとは限らない。本研究により、インプラント補綴物に対して有効なブラッシング法や歯ブラシの形態が示唆された。

演題3. インプラント上部構造の清掃に有効な歯ブラシの形態

○武田 未来, 中島久美子, 川村 涼子,
松本真由子, 高橋 直子, 赤松 順子,
杉山 芳樹*, 鬼原 英道**,
高藤 恭子**, 相澤 文恵***,
近藤 尚知**

岩手医科大学附属病院歯科医療センター
歯科衛生部

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座
口腔外科分野*

岩手医科大学歯学部補綴・インプラント学講座**

岩手医科大学歯学部口腔医学講座予防歯科学分野***

目的：インプラントの長期安定を図るためにはセルフケアにおけるプラークコントロールが極めて重要である。しかしながら、上部構造の形態は天然歯と異なり、カンツォアが大きくなることも多く、メンテナンス時に歯頸部のブラッシング法の指導を行っても習得が困難である。そこで今回インプラント補綴装置のプラークコントロールに有効な歯ブラシの形態について比較、検討を行ったので報告する。

対象及び方法：口腔インプラント科においてメンテナンスへと移行している33歳から83歳の患者（平均59.3歳）を対象とした。対象とした患者のインプラントの埋入部位は上下顎臼歯部で、埋入本数は62本（平均2.7本）であった。プラークの染色を行い、市販のコンパクトヘッ

ドでラウンドカット毛の平切りの歯ブラシ（以下A）とサイドがテーパード毛で中心を短くカットした凹型断面の歯ブラシ（以下B）を用い、プラーク除去効果を比較した。プラークの付着状態の評価についてはNavyの指数を用い、評価を行った。各歯ブラシのプラーク指数の有意差検定には対応のあるt検定を用いた。本研究は、岩手医科大学歯学部倫理委員会の承認、並びに被験者の同意を得ている。

結果：Navyスコアの減少量はAでは、 1.12 ± 1.11 、Bでは 2.33 ± 1.69 であった。対応のあるt検定を用いて分析した結果、両群には統計学的に有意な差が認められ、Bの清掃効果が高いことが示された。

考察及び結論：インプラント上部構造の歯頸部へのアプローチは患者のスキルを補う構造を有する歯ブラシを用いることでプラーク指数を減少することができた。メンテナンス中の患者の中にはモチベーションが高いにもかかわらず歯頸部にプラークが残存することも少なくない。そのためリコール時には、ブラッシング法の技術の指導のみに終わらせることなく、上部構造の形態を考慮した適切な歯ブラシを選択することが重要であると考えられた。